

2. 専門医として21世紀をどう生き抜くか

木船小児歯科医院 木船 敏郎

当小児歯科医院は、昭和59年に開業し、今年で12年めになる。

年間の新患来院者数を比較してみると、ここ2～3年新患の来院数が著しく減少している。平成5年の新患はピーク時の昭和61年に較べて約30%減少している。それに対してリコール患者数は毎年ほとんど変化がない。

昭和63年と平成6年の新患者検診時の一人当たりのウ蝕指数を比較してみると、0.3本のわずかな減少がみられた。ウ蝕の進行度でみると、 C_2 、 C_3 が減少し C_1 が増加している。年齢別に比較すると、1～3歳児ではウ蝕指数の増加がみられ、逆に4～6歳児では顕著な減少がみられた。1、2歳児では C_1 が増加しており、3歳児では C_1 、 C_2 とも増加している。逆に4～6歳児では C_2 、 C_3 が著しく減少している。

昭和63年と平成6年の新患の年齢分布を比較してみると、2歳児の割合が増加し、3、4歳児の割合が減少している。新患の年齢のピークは3歳から2歳に変化し、全体に低年齢化している。

このことは、疼痛、腫脹を主訴とした来院が減少したことを意味し、歯科医師として喜ばしく、しかたのないことだろう。当医院では、当初から予防を中心においできた。特別なことはしてないが、毎回の治療時に必ず予防指導を組み込んでいる。

今回来院患者の保護者におこなったアンケートで『当歯科医院に一番期待することは？』の回答で一番多かったのは、『子供の成長にあった正しい治療』が29%だった。次には、『怖くない治療』が18%、『早く治療を終わらせて』が16%だった。

つまり本音は、怖くない治療や、来院回数が少なく短時間の治療を望んでいる。我々は謙虚にこれに応えねばならないだろう。

小児歯科医療の中心は、『歯科治療による子供の心理負担にどう対処するか』にあると、私は思う。このテーマにそった研究を大学で盛んにおこなって、学会の一つの柱にしてほしいと思う。

3. 当医院における歯科医療サービス

いづち小児歯科 井槌 浩雄

総務庁の「日本標準産業分類」によると医療は、ホテル・旅館業等と同様のサービス業に位置付けられている。医療におけるサービスとは、医師だけではなく医療従事者を含めた医療機関が提供するすべての行為を指すといわれている。

医療は、高次元の治療を行うのは当然であり、患者に対しこの医療施設を選択して良かったという満足感を与える必要がある。特に小児歯科は、治療の対象者のみならずその保護者(主に母親)に対しても配慮する必要がある。ややもすれば、我々がベストを尽くした治療行為(サービス)を行なったとしても、まったく評価されないことにもなりかねない。

当医院は、“患者に歓迎される医院”を目指して昭和60年に開院した。この10年間に歯科医師会の所属班の班員は10人から20人となり、福岡市の小児専門医院も8医院から17医院へと増加している。今回、当院の新来患者の年次的変化、来院患者の地域分布などを調査するとともに、現状の再確認を行った。まずこれらを供覧した上で、当院で行っている患者とその保護者へのRELAXATIONのためのサービスを紹介する。

また、当院で生じたアクシデントを通じ、あらためて痛感させられた『インフォームド・コンセント』というサービスの重要性についても考えてみたい。

4. う蝕予防と咬合誘導における早期発見長期管理について

ありた小児・矯正歯科 有田 信一

私が開業して約15年の間に小児歯科を取り巻く環境(経済環境、小児の生活環境、医療環境など)は大きく変化した。小児歯科医院に対する住民のニーズ、地域社会のニーズも大きく変わり、結果として当院における歯科医療の供給内容が変化してきた。そのため、従来の社会保険制度と合わない部分が多くなり、これが小児歯科医療の現場を悩ます一因になっている。

一方、地域として長崎市の小児の口腔保健の状況を見てみると、処置率の改善は認められるものの、う蝕罹患者率やう蝕罹患歯率からみると、小児の歯科疾患量の減少そのものに、歯科医療環境の変化が関連しているとは思えないデータがある。

そこで、今後の小児歯科医療を考えるに当たり、個人のライフサイクルを対象とした医療体系と併せて、地域全体の小児を見据えた医療を考える必要を感じている。

つまり、地域全体の小児の口腔の健康にとって、何が大事なのか、何が解決可能なのかの観点で、小児歯科医療の抱える問題に優先順位を付けて、効率的に解決していくことが重要である。一方、個人的な対応としては多様化する患者のニーズに的確に答えることができる医学理論とそれに基づいた医療技術を身につけることが肝要と考えるが、同時にそのような技術に限られた小児のみへの適用でなく、全ての小児に応用できる社会医療システムを作ることが必要と思う。

今回は私がこのような視点で、取り組んできたう蝕予防と咬合誘導における早期発見長期管理の考え方と試みを紹介し、ご批判を仰ぎたい。